

東京大空襲戦災資料センター訪問 12月9日

捕虜日米の対話：伊吹由歌子

12月9日、米元捕虜飛行士の一行は、江東区の東京空襲戦災資料記録センターを訪問した。

米軍による空襲で日本中が焼け野原となり、おびただしい数の日本人が犠牲となったが、これらの空襲を行って撃墜された飛行士たちのその後の運命を知る日本人は少ないだろう。

無差別爆撃の飛行士たちは、日本軍から「お前たちは戦争犯罪人であり、捕虜としての待遇を受ける資格はない」と言い渡され、「特殊捕虜」として、一般の捕虜収容所ではなく、大手町の堀端にあった東京憲兵隊司令部の「馬小屋」と称された木造の建物に多数で押し込められた。米側空爆情報を得ようとする拷問と訊問、餓え、闇、不衛生な汚れ、看守による行き当たりばつりの残酷な仕打ちと脱水症状は、人間性をも脅かし、士気のうえでも試練だった。重度のやけどを負った飛行士たちも治療は施されず、長時間 苦しみつつ死んでいく者たちも多かった。捕獲された飛行士たちの処刑や人体実験も行われ、戦後BC級戦犯裁判の対象となっている。捕虜飛行士の生還率は約50%と、一般捕虜のそれ（日本国内の捕虜収容所にいた捕虜の生還率は約90%）に比べて著しく低い。

1945年3月10日の東京大空襲の時、B29飛行士として爆撃に参加したフィスク・ハンリーさんは、この空襲の体験者でセンターの証言者として活動する二瓶治代さんと一緒に3階の展示室に。二瓶さんは折重なって死んだ人々の一番下になっていて炎を生きのびた方で、当時8歳。ハンリーさんは25歳だった。ハンリーさんはIt was BAD! Bad, bad! と仰り、時にはI was badとも。入口に焼夷弾の展示と説明があり、自ら詳しく説明してくださる。日常的に行われていた民間人消防団の訓練写真やユニフォームを最初、本土決戦に備えての軍人の訓練と思われたようだが、展示されたユニフォームにより、軍服ではないと確認。そのあたりから、見る姿勢がぐっと現実味を帯びる。3月10日の写真を見ながら、「ひどい！ 僕はずっと上にいて見たのだが、どこも炎だった」。

その後はコーネルさん、次にライアンさんと二瓶さんが会話。コーネルさんは「これはルメイの犯した過ちだ」と仰った。ちなみにライアンさんも日本到着の翌日、ロビーで全員が顔をそろえた際、「ルメイは戦争を終わらせたヒーローだ」と言うハンリーさんに対し、「I hate LeMay (僕はルメイが大嫌いです)」と応答された。ライアンさんは「3月9日、10日頃は大森収容所にいたが、翌日から焼け跡の整理に駆り出され、まだ使える瓦を集めたりした。日本には物資はなかったからね」と仰っていた。

最後にハンリーさんと二瓶さんが並んで腰を下ろした。

二瓶：私は日本人ですけど憲兵はとても恐ろしいと思っていました。「空襲が怖い」というと、両親から「そんなことを言うんじゃない。聞かれたら憲兵につかまってしまうよ」とよく言われました。ハンリーさんがその拷問に耐え、こうしてお会いできて本当に嬉しいです。

ハンリー：僕たちは生き延びましたね。貴女は仏教徒ですか？

二瓶：（ちょっと驚き）私は違います。

ハンリー：僕はクリスチャンです。貴女は仏教徒でいらっしゃるかは知らないが、唯一の神という存在が僕たち二人の命を助けてくれた。何故だと思いますか。

二瓶：何故でしょう？そういう意味では私たちふたり、おなじですね。

お二人ともにそれぞれの場で、戦時体験と戦争の破壊・悲劇を若い世代に知らせる活動を続けておられる。なお、車椅子が混んだため東京大空襲戦災資料センターを見学できなかったダウニングさんは、東京都慰霊堂において特に希望してバスを降り、東京大空襲の展示を御覧になった。



ハンリーさんと二瓶さん